

## 古代教会スラヴ語における 前置詞 *у* の用法と意味

服部 文昭

古代教会スラヴ語 (OCS) ②1 の前置詞 *у* は、必ず属格とともに用いられることから、すでに明快な語義区分が定着している。しかし、実際の用例の中にはその語義区分の枠内では解釈しきれないものもある。本稿は、このような問題点の考察をするものである。

### 1 前置詞 *у* の語義区分例とその問題点

OCS での *у* の意味は、通例、二つ挙げられている②2。その一つは、*prosi* などの動詞群と用いられる『分離』の意味であり、もう一つは、静的で空間的な『近接位置』の意味である。典型的な用例には次のようなものがある。

1) (Lk11-13Mar)

КОЛЬМИ ПАСЕ ОТЬЦЪ С ПЪСВЕ ДАСТЬ АХЪ СТЬ. ПРОСАШТИМАЪ ОУ НЕГО.

2) (Jo20-11Mar)

Мариъ же стоѣше оу гроба вънѣ плачущи са.

しかし、実際の用例の中には、上記の語義記述だけでは具体的な文意が掴めない場合もでてくる。たとえば、次のようなものである。

3) (Mt3-6Mar)

и крылаахъ са оу него въ иорданъсцѣи рѣцѣ

3) における *у* は、上記の語義区分によれば、『分離』にあたるのかもしれない。しかし、いわゆる比喩的用法とみなしてもかなりの拡大解釈と言わざるをえない。この用例について Herodes は、上記の二つの意味の境界線上にあるとみなす一方で、このような *у* はときに受動態における動作主を表すとのコメントをつけている②3。

4) (Mt18-12Ass)

аште бѣдѣтъ оу ітера члкъ. ѿ бѣцѣ

という例は、単なる存在を表す文ではない。ここには所有の意味があると Vaillant も述べている②4。とすれば、ここでの *у* 句も (所有という行為の) 動作主を表していると考えられる。

このように、OCSにおける前置詞 *у* の語義区分は上記の二つだけでは明らかに不十分であることがわかる。

## 2 < *у* - 句 > の統語的分類

前置詞 *у* の意味を明らかにするために、その用例を統語的基準で整理した。用いる文例は、主として二つの四福音書（『ソグラフィオス写本』と『マリア写本』）及び二つのアブラコス（『アッセマーニ写本』と『サヴァの本』）から引いた。これは、前後の文脈が明らかでない点や比較の便を考えてのことである。

*у* の用例は、統語的には、次のように分類される（それぞれに典型的な例をそえて示す）。

### A 補語

5) (Mk6-22Mar)

ПРОСИ ОУ? МЕНЕ ЕМОУ?ЖЕ АИШТЕ ХОЩЕШИИ

### B 状況語 I

6) (Lk9-47Mar)

ІСЪ ... ПОСТАВИ Е ОУ? СЕБЕ

### C 状況語 II

7) (Mt27-57Mar)

ІЖЕ И ОУ?ЧИ СЯ ОУ?НІСА.

### D 定語

8) (Lk15-17Sav)

КОЛНКО НАИМЪННИКЪ ОУ?ЮЦА МОІГО І ИЗЪВЪДЖЪТЪ ХЛЪБИ.

はじめに引いた『分離』、『近接位置』の意味は、それぞれ A（補語）と B（状況語 I）とに対応する。残された C（状況語 II）及び D（定語）が検討を要するものである。以下、個々の例についてみてみよう。

## 2 - A 補語用法

補語用法は、*prosi* などの動詞とともに用いられて『分離』（～から）の意味を表す。

ギリシア語が、対格、*παρά* + 属格、*ἀπό* + 属格の場合にみられる註 5。ただし、OCS では前置詞をとまわらない補語で訳されていることもある。

9) (Mt7-11) (Mar)

ДАСТЪ ВЛАГА̄ ПРОСАШНИМЪ ЕГО.

(Zo)

ДАСТЪ ВЛАГАК̄ ПРОСАШТНИМЪ ОУ? НЕГО:

10) (Mt2-4) (Ass.)

къпрашаише ѿ кѣде хъ раждѣтъ сѧ.

(Mar)

къпрашааѡ оу ницѣ гдѣ хъ раждакт сѧ.

なお、前置詞をともなわない補語をとるか、あるいは u + 属格をとるかは、動詞の二重支配と関係があると思われる。

11) (Jo19-38) (Mar)

По сицѣ же моли пилата носифѣ.

(Ass)

Проси ѿ пилата носифѣ.

## 2 - B、C 状況語用法

状況語としての用法は、ともに用いられる動詞の統語論的、また、意味論的特性によって二つの場合に分けられる。一つは、伝統的な意味での統語上の主語（主格の主語）と動作主が一致している場合である（I）。もう一つは、統語上の主語が動作主とは一致せず、対象や経験者（あるいは受益者）に該当する場合である（統語上の主語を欠く場合もここに含まれる）（II）。理想的には、結合価文法であれ格文法であれ、統語論的意味論的特性による動詞の分類をふまえたうえで検討されるべきことではあるが、ここではあえて言及しないこととする。

(I)

(I)の用法は、『近接位置』の意味を表す（いわゆる比喩的用法も含まれる）。ギリシア語が、παρά + 属格/与格、πρός + 与格/对格、ἐπί + 对格の場合にみられる。

12) (Jo20-12Mar)

единого оу главы. ѿ единого оу ногоу.

13) (Lk24-22Mar)

бывъша рано оу гроба.

14) (Mt26-18Mar)

оуште. сътворѣ пасѣ съ оученикы своими.

15) (Lk11-37Mar)

да овѣдоу оутѣ оу него.

16) (Jo1-40Mar)

прѣвѣyste оу него день тѣ.

17) (Jo8-38Mar)

ѣже видѣхъ оу отца моего . . . ѣже видѣсте оу отца вашего

(II)

(II)の用法は、統語論的、意味論的に主格主語が動作主とは一致しない動詞と用いられ、そこでの『動作主』を示す働きをする。

このような語義区分を設けたのは、スラヴ語の中でもuの多様な用法をよく残しているロシア語との比較に基づいてのことである。たとえば、現代ロシア語の

У меня есть машина.

У меня нет словаря.

のような文では、<u-句>が意味上の主語である。また、いわゆる所有表現以外の文、

У бабушки колет в боку.

のような文でも、<u-句>が意味上の主語である。このように、いわゆる所有表現文や主格主語を欠く文における<u-句>の意味上の主語としての働きは理解されやすいものであり、広く認められている。

歴史的にも、民衆の言葉では、

впереди его проехано у богатыря.

などの例が知られている(註6)。また、ロシア語の方言では、主格主語を持つ文においても、<u-句>が所有者としての主体ではなく、真の主体としての『動作主』の意味を表す場合もあることを、Maslovも指摘している(註7)。

このように、一見してすぐ解る種類の文においては、<u-句>が意味上の主語になることは早くから指摘されていた。それゆえ、動詞の統語論的、意味論的特性を考慮すれば主格主語が対象や経験者(あるいは受益者)にあたる場合には、<u-句>で動作主を表す文もあると考えられる。

OCSでは、ギリシア語が、与格、παρά + 属格、ἐν + 与格、ὕπὸ + 属格、ἐπί + 属格の場合にみられる。

次の例がこの用法の意味をはっきりと示している。

18) (Mt15-33) (Mar)

отъ бждѣ възвѣмѣ на поустѣ мѣстѣ хлѣбы.  
(Sav )

къде оуѣнасъ въ поустѣ мѣстѣ хлѣбъ

Mar は動詞の人称定形を用いて普通の主格構文に訳している。

先に引いた、Herodes が分類を保留した例文やVaillantが所有表現と指摘した例文はここに含まれる。

19) (Supr395-27)

снца же во ѿ оуѣнасъ словесы худа ѿ оуготовѣна трепеза.

20) (Mt28-14Mar)

ѿ аште се оуслышано бждетъ оуѣне мона.

21) (Supr557-11)

не вѣаше же оуѣнего разлженѣ

22) (Lk10-7Mar ) (注8)

ѣдѣште ѿ пнѣште ѣже сътъ оуѣнихъ.

4) (Mt18-12Ass)

ѿште бждетъ оуѣтера чкк. ѿ оѣць ѿ

例文 7) と 3) とは同じように考えてよい。すなわち、主格主語は経験者（あるいは受益者など）を表し、動作を主導する『動作主』は <u-句> が表していると考えられる。

7) (Mt27-57Mar)

ѿже ѿ оучи са оуѣна.

3) (Mt3-6Mar)

ѿ крышаахъ са оуѣнего въ иврданѣсцѣн рѣцѣ

## 2 - D 定語用法

定語用法は、『所有(所属)』の意味を表す。

ギリシア語が、属格、παρά + 与格の場合にみられる。この語義区分を設けたのは、所有(所属)を表す属格とパラレルに使われている次のような例があることによる。

23) (Lk15-17) (Sav)

коликѣ наѣмѣникъ оуѣоца моѣго ѿ ѿзвѣдажтъ хлѣбн.

(Mar)

КОЛНКО НАПАВЪНИКЪ ОТЪЦА МОЕГО. ИЗВЪКВАЖТЪ ХАЪЕН.

24) (Supr183-4)

мждростъ во чловѣчѣска. жродѣство оувога кѣтъ.

25) (Supr313-28)

по истинѣ во чловѣчѣска сѣмрътъ. сънъ оу господи мѣнитъ са.

26) (Supr210-10)

снѣ оубо сватаѣ мжченика. война вѣѣста оутого кѣназа мжчаштаѣго крѣстиѣны.

Mar の次の例では、二つの u が用いられているが、はじめの u が定語用法であり、後の u は状況語 (I) の用法である (後の u については、前置詞 o を用いている Sav と比較せよ)。

27) (Jo17-5) (Mar)

и нынѣ прослави ма ты отче оу тебе самого.

славож жже имѣхъ. прѣжде даже не бысть миръ оу тебе.

(Sav26a)

и нынѣ прослави ма оче на несе. славож жже имѣхъ.

прѣжде быти всемоу миру о тебе.

( παρὰ θεαυτῶ . . . παρὰ σοί )

3 v" および ot" との関係 (" は ㄨ の翻字)

最後に、u と v" および ot" との関係を考えてみたい。

3 - 1

Herodes は、テキストに u と並んで v" が現れる点に関して次の二つの理由を挙げている。(1) 意味の面での混同。(2) 南スラヴ系の『地方的変種』に特徴的な音論的な変化 (v" > u) (註9)。だが、単なる意味の混同であるならば、pri の場合にも起こりうるはずだが、今回調べた OCS の枠内では併存例はなかった。

28) (Mk14-54Mar)

вѣ сѣда съ слоугами и грѣѣ са при свѣшти.

29) (Jo19-25Mar)

и стоѣхъ же при крѣтъ неѣѣ мати его и . . .

あえて指摘するならば、単なる混同ではなく本来 v" が用いられるべきところに意識して u をあてたと言える箇所もある。

30) (Jo14-17) (Mar)

въ васъ прѣбывають. и въ васъ бждеть

(Sav25b)

съ вами прѣбываетъ. и оубо васъ ёсть.

OCSの枠からは外れるが、30)と同じ箇所をv"で訳している『オストロミール福音書』と『ドブロミール福音書』がLk2-9ではuを用いている(Mar、Zo、Ass、Savはv")点も注目される。

31) (Mar)

и се ангѣлъ гнѣ ста въ нихъ.

(Ostr)

и се ангѣлъ гнѣ . ста оубо ихъ

32) (Mt2-18) (Ass)

гла къ рама слышанъ бы.

(Sav)

гла(ас)ъ оубо рама слышанъ бысть.

(Mar)

гла велнкъ слышанъ бы.

例文32) (Sav)のuは動作主を表す状況語(II)の用法である。Zoはこの箇所を欠いている。

3-2

ot"に関しては、uの二つの用法で重なりがみられる。一つは補語用法であり、次のような例がある。

33) (Jo4-52Mar)

и праша же родины отъ нихъ. въ кжж соудже емоу бы

34) (Mt20-20Mar)

просашти нѣчесо отъ него.

35) (Jo4-9) (Mar)

како ты нюден съ отъ мене пити просиши. же-  
ны самарѣнына сжшта.

(Ass)

КАКО ТЫ ИЮДИИСУ ПРОСИШОУ МЕНЕ ПИТИ·ЖИ  
НЫ САМАРѢИТЯНА СЖЩА·

36) (Jo11-22) (Mar)

ѢКО ЕГОЖЕ КОЛИЖДО ПРОСИШ ОУ БА ДАСТЬ ТЕБѢ БѢ·

(Zo)

ѢКО ЕГОЖЕ КОЛИЖДО· ПРОСИШ ОТЪ БА ДАСТЬ ТИ БѢ·

もう一つは、動作主を示す状況語 (II) の用法である。例文 3) には、次のようなヴァリエントがある。

3') (Mt3-6Ass)

Ѣ КРЩАХЪ СА О НЕГО ВЪ ИЕРУСАЛИМѢ·

しかしながら、例文20) で引いたMt28-14などは、ギリシア語に ὑπό というヴァリエントがあるにもかかわらず、OCS (枠を拡げてOstrなどでも) ではuで訳している点は注目に値する。ot" と異なり、uのこの用法が持つ [+animate] 的性格を示しているとも考えられる。

Herodes は、『近接位置』の意味でも重なりがあると主張し、次の例を挙げている (注10)。

37) (Jo1-1) (Mar)

Ѣ СЛОВО ВѢШАЕ ОТЪ БА·

(Ass)

(H) СЛОВО БѢ ОУ БА·

38) (Jo1-2) (Mar)

(注11) ГЕ ВѢ ІСКОНИ ОУ БА·

(Ass)

ГЕ ВѢ ІСКОНИ ОУ БА·

ここでのuも、『近接位置』ではなく『意味上の主語 (動作主)』とみなせれば問題はないのだが、宗教的意味合いの極めて大きい箇所なので、次の事実を指摘するだけにとどめたい。(SJSもot" の項ではこの例を引いていない。なお、uの項は未刊)。

1. Ass は、uを選択しうる文脈で他と比べてuの使用例が多い: Jo1-1, 2. Jo4-9. Jo11-12. Jo15-16. Jo19-38. Mt18-12 など (先に引いた『ドブロミール福音書』は、uとot" とが併存する場合、必ずuを用いている)。

2. uのヴァリエントとしては、Joではot" の使用例が多い。

3. 接頭辞を持つ動詞の場合には、その接頭辞が前置詞の選択に影響を与えている

と考えられる。

39) (Mt5-42) (Mar)

и хоташтаго отъ тебе заимъ взати не отъверати.

(Sav)

и хоташцаго ѿѣйте въ заимъ взати не възврати.

( ἀπὸ σοῦ . . . ἀποστραφῆς ) (註12)

#### 4 まとめ

3-1でもみたように、OCSにおける前置詞 *u* は、けして徒に *v* と混同されているわけではなく、それぞれの文脈である特定の意味を表すために積極的に用いられている前置詞なのである。ここでは、『動作主』および『所有(所属)』の語義区分を独立に設けるべきであると指摘したが、今後、統語論的、意味論的な動詞の分類とスラヴ諸語での *u* の用法の比較研究を通してさらに検証を進めたいと思う。

また、3-2で触れた Jol-1, 2 に代表されるような問題については、主格、主語、動作主といったいわゆる文法レベルを超えた、『主題』という語用論レベルの要素が関係してくる。現代語の研究と異なり、たとえば、語順の考察が有効であるのか否かなど、多くの困難な点があり、本稿では言及を控えざるをえなかったが、今後の重要な課題としたい。

(注)

1) 使用される略号。

Ass	アッセマーニ写本	OCS	古代教会スラヴ語
Jo	ヨハネ伝福音書	Ostr	オストロミール福音書
Lk	ルカ伝福音書	Sav	サヴァの本
Mar	マリア写本	SJS	古代スラヴ語辞典
Mk	マルコ伝福音書	Supr	スプラシル写本
Mt	マタイ伝福音書	Zo	ゾグラフォス写本

2) たとえば、herodes (353)、Xaburgaev (353) など。

3) Herodes (354)。

4) Vaillant (196)。

5) 翻訳に用いられた諸原典を正確に特定することは不可能である。しかし、たとえば、ネストレ版との比較などは、無意味なことではなく、むしろ、全体の傾向を把握するうえでは有効である。ただ、OCS文献はけして逐語訳ではなく構文的にもできるだけスラヴ語を活かそうとしているので特に必要な場合以外はいちいち対照せずスラヴ語自体の問題として扱うことにする。

6) Buslaev (493)。

7) Maslov (237ff.)。

8) ギリシア語は、冠詞 + παρά の構文。動詞の意味論的特性が異なる次の例を参照。

(Mk3-21Mar)

СЛЫШАВЪШЕ ИЖЕ ВЪДХЖ ОУ НЕГО. СЪИДЖ ИАТИ И.

9) Herodes (353)。

10) 同上。

11) Sreznevskij の語義区分 (ただし用例はOstrの同所) によって補った例。

12) ZoはMarと同じ。Assは前置詞句を入れていない。

## 底本

Quattuor evangeliorum versionis palaeoslovenicae codex Marianus [. . . ]  
edidit V. Jagić , Berolini-SPb 1883 . 復刻版 : Graz 1960 .

Quattuor evangeliorum codex Glagoliticus olim Zographensis nunc Petro-  
politianus [. . . ] edidit V. Jagić , Berolini 1879 . 復刻版 : Graz 1954 .

Vajs Jos. -Kurz Jos. , Evangeliarium Assemani. Tomus II. Edidit Jos. Kurz  
Pragae 1955 .

Ščepkin V. , Savvina kniga [. . . ] , SPb 1903. 復刻版 : Graz 1959 .

Sever 'janov S. , Suprasl 'skaja rukopis ' . Tom I [. . . ] , SPb 1904  
復刻版 : Graz 1956 .

\* \* \*

Ostromirovo evangelie [. . . ] izdanoe A. Vostokovym. 復刻版 : Wiesbaden  
1964.

Dobromirovo evangelie [. . . ] podgotvi za izdavane Borjana Velčeva, So-  
fija 1975 .

## 主な参考文献

Buslaev F. I. , Istoričeskaja grammatika russkogo jazyka, M 1959.

Herodes St. , Staroslavjanskije predlogi , Issledovanija po sintaksisu sta-  
roslavjanskogo jazyka , Praga 1963.

Lomtev T. P. , Očerki po istoričeskomu sintaksisu russkogo jazyka, M 1956

Maslov Ju. S. , K voprosu o proisxoždenii possessivnogo perfekta , Očerki  
po aspektologii , L 1984.

Potebnja A. A. , Iz zapisok po russkoj grammatike, Tom I-II , M 1958.

Vaillant A. , Manuel du vieux slave , I , Paris 1964.

Xaburgaev G. A. , Staroslavjanskij jazyk, M 1974.

\* \* \*

Slovník jazyka staroslověnského , Praha 1966~.

Sreznevskij I. I. , Materialy dlja slovarja drevne-russkogo jazyka po  
pis 'mennym pamjatnikam, I-III , SPb 1893-1912 (復刻版 : Graz 1955-1956)